

2023年度 NO. 2 2023.7.31

目 次

1. 第 24 回通常総会の概要報告

6月10日(土)、第24回通常総会が開かれ、議案はすべて承認可決されたので概要を報告します。

ごみの問題は、プラスチックや紙、小型家電のリサイクル、魚アラ問題等々、いつの時代も山積しています。関西万博での「ごみ・リサイクル」の仕組み作りも気になるところです。今年度も様々な問題解決に取り組んでまいります。

2. 東大阪市の市民派議員の活動紹介

東大阪市の中西市議は、エコキャップの回収に長年携わっています。また、学校でのクラブ活動の教師への負担軽減を考え、地域で取り組めるスポーツへの移行へ尽力しています。エコキャップの回収はまさに「ちりつも」で少量ずつでも大勢が取り組むと大きなウェーブになります。同じように地域の課題にコツコツと取り組み、風穴をあけようと頑張っておられます。

3. 事業ごみ排出商店が得をする朗報

事業者はこれまで、きちんと計測することなしに、ごみ収集業者の言いなりの「どんぶり勘定」で廃棄物処理経費を支払っていた。それが業界の常識のようになっていた。そんな業界にも、パッカー車に計測機能が付いた車両「スケールパッカー車」が出回り始めた。ごみ収集にも「見える化」が進んでいるのだ。

4. 加藤さんのコラム 「ダーウィンとミミズ」

今回取り上げるのは、「うんこの博物学-糞尿から見る人類の文化と歴史」です。うんこというと子どもたちが喜ぶらしい。「うんこドリル」なるものが大流行だそうです。たかがうんこと思うなかれ、うんこは大切なものなのです。

「ダーウィン」と「ミミズ」の関係について、少し紹介します。

第 24 回通常総会の概要報告

第 24 回通常総会は令和 5 年 6 月 10 日（土）、大阪市福島区のすも一き一事務所で開催され、下記事項が承認可決されましたので、その概要を報告します。

記

1. 令和 4 年度事業報告

実施された主な事業は次の通り

- ① 情報提供事業は、年 6 回の会報発行（令和 4 年度 NO.1～NO.6）とホームページ運営を行った。
- ② 他団体との協働事業として大阪市が参加した「大阪ごみ減量推進会議」は地球環境基金助成の市民講座を開催したことに伴い本会も協力した。
- ③ 市民派議員との「ごみ問題学習会」事業（2007 年 7 月～）は ZOOM を活用して今年度は 3 回開催され、2022 年 4 月施行のプラスチック資源循環法の問題点を深掘りし、参加各市の取り組みをチェックできるようにした。
- ④ 東大阪のごみを考える市民の会は当会と協働して、東大阪都市施設組合が発電効率 26%と日本一で、年間売電収入額 7 億円（東大阪分）もあることを活用して太陽光発電装置購入の補助金に充当することを目指し活動している。
- ⑤ 大阪府の魚アラは岸和田市にある小島養殖で魚粉になっているが、経営主体が小島養殖から埼玉の三幾飼料に代わり、引き続き飼料化されている。三幾飼料は京都府や三重県からも魚アラを回収して操業率を上げている。

2. 令和 4 年度収支報告 （単位：円）

【収入の部】

前期繰越	882,765
当期収入 会費	170,000
寄付	0
事業収入	0
計	
合計	1,052,765

【支出の部】

当期支出	事業費	120,247
	管理費	165,348
	計	285,595
次期繰越		767,170
合計		1,052,765

3. 令和 5 年度事業計画

主な事業計画は次の通り

- ① 情報提供事業
年 6 回の会報発行については、必ずしもごみ問題とは直接関連しない会員の社会活動も紹介する方針を強化し、会員に原稿を依頼する。また、ホームページ及びフェイスブックによる情報発信を行う。
- ② 市民派議員を中心にした「ごみ問題学習会」を今年度は随時開催し、参加各市議の行政が抱える諸課題の改善に取り組む。

- ③ 大阪市環境局との協同事業の一つである「大阪ごみ減量推進会議」は25年開催予定の万博から排出される事業系一廃の適正な処理のあり方を考える学習会を中心に事業を行う。
- ④ プラスチック資源循環法の目玉である製品プラをリサイクルしている市町村を調べると大半がRPFになり燃料として利用されていることが明らかである。焼却発電している行政にとってはお金と手間をかけて自市の炉でなく他所の炉で燃やすことになるだけである。このことを府下の市町村に知らせ、単一素材でできたペットボトルやトレイなど以外は、発電焼却に回し、熱回収を高める方が経済的であるしかつCO2削減効果もあることを明らかにできる調査活動をする。
- ⑤ 魚アラリサイクル問題については、昨年度と同様の流れになると思われる。大阪府が事務局になっている協議会の解散を狙っているが、排出者と処理を担う事業者が直接契約をさせるとの目標が未達のままの解散は無責任であるので、当会は引き続きこの問題の解決を目指す。

4. 令和5年度収支予算 (単位：円)

【収入の部】

前期繰越	767,170
当期収入	
会費	155,000
寄付	0
計	155,000
合計	922,170

【支出の部】

当期支出	
事業費	130,000
管理費	172,600
予備費	10,000
計	312,600
次期繰越	609,570
合計	922,170

以上
<文責：水川>



4 ページのスケールパッカー車
極東開発工業（株）のHPより

事業ごみ排出商店が得をする朗報

得をするというのは儲かるという意味ではない。多くのスーパーや個人商店では事業ごみを専門業者に委託処分されているが料金は1袋集めていくらとされていることが多いと思われる。数年前あるスーパーでは重量で支払うことに改めたという。ごみ収集業者に対し1袋なんぼのどんぶり勘定からkg単位の実質重量制に変えたのである。これにより適正になり結果として安くなったということで得をすると言うわけである。

この際ごみ収集業者が導入している重さを計れる収集車とはどんなものかを調べてみた。

●**スケールパッカー車誕生**：ごみ収集車は進化している。客先でごみを投入するたびに何kg積んだかわかるような計量機能(スケール)の付いた収集車である。

計量機能付きごみ収集車を初めて世に出した極東開発工業株式会社の三木工場に訊いてみた。計量機能のついたパッカー車は1988年に開発された。古紙の回収に使いたいという特定のお客様より計量機能のついた収集車を要望されたことにより開発されたものである。その後一般販売を開始したのは2002年、今では10台に1台程度は計量機能付きとなっている。

その構造は車のシャーシーと荷物台との間の四隅にロードセルを挟むように配置し高精度に計量できるものである。ダンプカーの油圧を荷重に変換表示する自重計とは全く異なるものである。

●**特徴・用途**：これまではごみの重さは定置式トラックスケールに車体ごと乗り総重量(実車)と風袋(空車)重量の差し引きで計っていた。この方式では客先ごとの重量を知るには1軒ごとに定置式で計量しなければならなかった。ルート収集に出た際には客先ごとの積み込み重量は不明だった。

また、風袋をあらかじめ登録しておき実車重量のみを計る方式の場合には登録時にはなかった降ろさない道具や荷物を積んでいたり、乗車人数がたまたま変わったり、燃料タンクの空満により誤差が生じる。スケールパッカー車は、個別に収集する度にその重量を表示できメモリーに記録し運転室内にあるプリンターで紙に印字することができる。またインターネットで一軒一軒集めた重量や回収ルートも事務所に報告し客先にも報告することができる機能も搭載できるのである。

比較的高い精度で計量することができるのでごみ排出者にとっては実重量引取にしてもらうことで回収される重量を正確に知ることが出来ることから今までのように一袋なんぼトラック一車走ってなんぼといったどんぶり勘定がなくなり明確な取引で明朗会計が実現する。ごみ排出者にとっては実質的に安くなるのである。また重量が明確になることにより分別などのごみ減量努力が見える化できるのである。

スケールパッカー車は古紙回収業者はもちろん産業廃棄物処理業者や運搬業者に使われている。自治体の収集に使われる場合には収集エリアごとの重量を集計するといった使い方ができ分別の成果やルール違反のごみや産廃が混ぜられていないかなどの把握に役立っているのではないかと想像される。スケールパッカー車の値段は通常の価格より約300万円高くなっているという。例えばパッカー車が600万円だとするとスケールをつけると900万円となるとのことである。

●**計量検定**：定置式トラックスケールは商取引に使うには検定・定期検査を受けなければならないが、スケールパッカー車の場合はこの制度の対象外とされており検定は受けなくてよい。特定計量器 自重計という位置付けであるが取引の証明のための計量に使えるものである。ただし重量を表示するだけでお肉屋さんの店先にある計りのように重量と合わせて金額を表示することはできない。このスケールパッカー車の計量表示は1kg単位で表示される。計量精度は±10kg/最大重量である。

(楠 大吉記)

東大阪市の市民派議員の活動紹介

はじめに

先月号で紹介した「東大阪のごみを考える市民の会」の会員の中西のぶひろ市議は、ペットボトルのキャップだけを集めるユニークなリサイクル活動や学校施設の地域への開放、瓢箪山の商店街活性化活動の支援などなど、地域密着型の諸活動を長年続けています。大半の市議は例えば製品プラリサイクルを進めろ！と当局を叱る質問しかしない中で、これら有意義な議員活動を続けていますが、直ちに票に結びつかず、9月の選挙は決して安心とは言えない状況です。

小さな市民活動に参画してくれ、かつ地域で活動を深めている中西市議を当会で応援するには、その活動振りを本会報で紹介することしかできませんが、精一杯各活動を深掘りしたいと思います。

1. エコキャップ回収活動

中西議員は、10年ほど前からペットボトルのキャップだけを回収するユニークなリサイクル活動を続けています。2週間で200kg程度（2kgで860個程度だから8.6万個）になると、摂津にある民間のリサイクル業者へ運搬していましたが（図1の写真）、半日仕事になるので、現在は東大阪都市清掃施設組合に持ち込むように変更しました。

近くの幼稚園の職員が熱心でたくさん集めますが、運搬はしないので中西事務所まで持ち込むものもかなりあるとのこと。



図1 エコキャップの運搬

1) リサイクル業者

摂津のリサイクル業者は、通例の業者でなく、横浜に本部がある「エコキャップ推進協会」と提携した「カーズコージャパン（株）NPO子供食堂」です。珍しい名前なので t e l すると、車のバンパーを粉砕する仕事をしているのでエコキャップもできるとのことです。この会社は同時に子供食堂も月 1 回運営している珍しい会社で、売却代金のうち 5 円／k g を本部へ送金しているのだそうです。でも中西市議にとっては遠いので持ち込み先を変えたのです。

2) エコキャップ推進協会

中西議員が、この協会はトラブルが報道されて信用を落としていると言っていたので、HP を調べると以下のことがわかりました。

佐川急便配送システムについてー(図解)

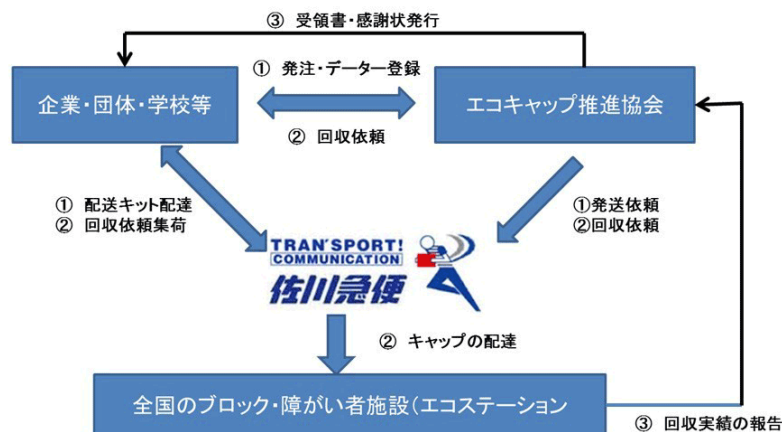


図2 エコキャップ回収の仕組み

① 回収の仕組みは、図 2 のようになっており、参加者は佐川急便が指定した専用袋を一枚あたり 70 円で購入して、ここに入れると 430 円／袋の運賃で、異物を除く作業をする障害者団体などまで運搬し、ここは異物を除去したキャップを 150 円／袋で、キャップを粉

砕してくれる業者に売却します。参加者は 150 円のうち 100 円を協会に寄付する形になっています。中西議員は佐川に頼まないで自車で運搬していたわけです。

② 協会は異物を除去する場所を全国的に配置し、近畿地方の 6 府県は 10 カ所ありますが、大阪はわずか 2 カ所しかないの、中西議員は東大阪都市清掃施設組合に変えたのです。結局参加者は 500 円／袋負担して、異物を除去する障害者団体などが 150 円／袋をもらい、うち 100 円を協会に寄付するお金の仕組みになっているのです。

③ 協会の HP を見ると 2007 年～現在まで 16 年間で 2 億 3,800 万円も寄付されていますから、年平均で 1,500 万円もの収入があることになります。

④ こんな多額のお金を扱う市民団体はごく一部ですからお金の管理を丁寧にできず、不祥事として大きく報道されたとのこと。その結果ポリオワクチン配布をしている団体との関係性が悪くなってしまい、現在はこの団体との付き合いは切れ、ボールペンやバイクのフェンダー、おもちゃ等々の材料として使うように方向転換しています。

3) その他の団体の回収活動

キャップを集める団体は他にもあり、「大阪市一般廃棄物適正処理協会」という大阪市内の一般廃棄物収集業者が作る業界団体の有志も社会貢献活動の一環としてエコキャップの回収事業をしています。指定袋を作り、そこへ入れてもらおうとリサイクル業者が再利用する仕組みにしてあるそうです。大阪市内で活動する個人や団体しか利用できない限界がありますが、私は量が少ないから運動にはならないと思いついていたのは思慮不足と痛感しました。小さいエコキャップでも関心を持つ人が手軽に行える活動だと、スーパー等が回収場所を提供してくれ、異物除去を障害者団体等が担い、リサイクルする仕組

ができあがっていくのです。行政が行うリサイクル活動と同様、単にリサイクルというよいことをしていると思ひ込むだけでなく、モノとお金が流れるルートを一つ一つ確認することが大切だなあと改めて気付きました。

2. クラブ活動を学校から地域へ

先生のクラブ活動の指導負担が過大になる問題を踏まえ、文科省は 20 年ほど前「総合型地域スポーツクラブ」の結成をするよう市町村に勧めています。でも言うは易し・・・で、地域で子供から大人までの広範囲の各スポーツのコーチをできる人は容易に見つからない状況下では、粘り強くゆっくり地域でできることを探して、議会で提案する以外に有効な手はありません。それを中西議員は 20 年前から始めたのです！

1) 「花園」に第 1 号できる

東大阪市の「花園」はラグビーの「甲子園」とウリにしています。文科省は 2000 年頃「総合型地域スポーツクラブ」結成を各自治体に勧めました。そこで中西議員は「スポーツエリア花園」をこの一つにすることを実現させました。近鉄花園ラグビー場を拠点にしてラグビー・サッカー等の競技の支援を地域の住民の中で経験のある人が行える仕組みを創ったのです。ラグビーの近鉄ライナーズのメンバーや、卓球で全日本 4 回優勝した松下氏を「スポーツみらいアンバサダー」に就任してもらい、地域スポーツを地域に根付かせる一環にしようとしたのです。

しかしソフト施策の発展は文科省が“上から目線”で文書で勧めるだけでは、形になりがたく、最も有効と思われる「学校体育施設の開放」は“道遠し”です。教育大池田の事件以来、学校側のガードがさらに固くなったのが要因ですが、中西議員は諦めることなく現在も議会質問の中で言い続けています。

2) 教委から市長部局へ管轄変換

スポーツは教育的な観点から法律で教育委員会の所管になっていましたが、2007 年の法改正で、教委から地方公共団体の長が所管することが出来るようになりました。これを受けて中西議員は議会では取り上げたところ 2020 年に、「都市魅力産業スポーツ部」ができて、スポーツを学校体育を除いて教委から市長部局に移しました。このソフト施策も容易に形になりがたく、市立の体育館や運動場と学校のそれを一括して管轄することは“道遠し”の課題です。

3) THINK GLOBALLY & ACT LOCALLY

中西議員の活動を見ていると「Think Globally & Act Locally」を地で行っていることが実感できます。

環境省が管轄しているリサイクル施策は、ハコモノを造るだけでは実現せず、本稿で紹介した中西議員のエコキャップ回収活動が決め手の一つになるなど、地域で旗振り役を担う人が必須です。同じ事が文科省のソフトなスポーツ施策にも言え、地域で地道に諦めることなく一步一步進むことができる有効打を探し続けることがコツのようです。

(森住 明弘記)

本は面白い。本を読み始めた瞬間に、どんなに遠い過去でも、どんなに遠い場所でも、すぐに連れて行ってくれる。私が今回、取り付かれた本は『うんこの博物学——糞尿から見る人類の文化と歴史』。著者はオランダのミダス・デッケルス。私と同年の生物学者。日本でいえば養老孟司先生のような方です。

私はこの7月に、「学校のトイレを人権から考える」という企画を考えたので、その予習のために読んだ。この種のものとしては、大昔に『糞尿博士世界漫遊記』という抱腹絶倒の本を読んだことがある。中村浩という著者は、その当時、もう一歩のところで大宅壮一賞を受賞しかけた九大教授で、文明批評として面白いものだった。博士の生きた時代は、うんこに対する嫌悪感は激しく、ご家族からも敬遠された。しかし、この中村博士の眼光は鋭く、たとえば、フランスの香水工場を訪問した折には、糞尿を微量に混ぜて香水を造っていることを見逃さなかった。人が生きている本当の世界を見つめていた。

皆がうんこを嫌って、振り返りもしないことに、私は強い疑問を抱いて来た。体内にある時は、なんとも思っていないのに、いったん外へ出た途端に、自分が出した物であることを全く忘れて、憎悪の対象とする。忘恩の人々。私は出たばかりのものを、しげしげと見入って、自分の体の調子を探っている。この貴重なものをリサイクルすることに全身全霊をもって関心をもっている。

さて、『うんこの博物学』によれば、竜涎香（りゅうぜんこう、別名灰色の琥珀）は得も言われぬ芳香を発し、超高額で取引きされるという。この竜涎香、なんとクジラの古い糞の固まりという。またコーヒーの豆を餌として、動物に食べさせ、その糞から出た豆を乾燥させて絶品のコーヒーとして販売しているという。

さらに、近頃の医学では他人の腸内細菌を移植している。数年前に見た映像では、うんことは一言も、出なかったが、あきらかに人のうんこを移動させていた。その結果、元気のなかった人が、病院を出る時には、とても元気に帰っていった。

この『うんこの博物学』、400 頁もあるが写真も多く、飽きさせない。全頁、魅入られてしまった。たくさん紹介したいが、それは出来ない。ダーウィンのことのみを紹介します。

「ダーウィンはミミズの研究に生涯を捧げたのである。最も長い期間、ダーウィンに寄り憑いていた研究テーマは、実は進化論ではなくミミズだったのだ。1837 年に初めてミミズに関する講義をしてから、1881 年、人生最後の、そして魅力的な著作『ミミズの活動によって形成される植物質の土壌（副題 ミミズと土）』が刊行されるまで、その関心が途切れることはなかった。ダーウィンはこう書いている〔ミミズほど世界の歴史において重要な役割を果たした動物がほかにいるだろうか。多くはいないだろう〕。人間は大地から多くのものを受け取ってきた。だがミミズは何も受け取らない。むしろ大地をつくってきたのはミミズだ。ミミズはその糞で大地をつくるのである。ミミズは畑の地面の下で、生きたチューブのようになり返し腸の中身を搾りだす。その糞は、ひと盛りのパスタ料理のように見える」。

実に、皆がうんこを良く見、良く考えれば世界は変わる、と思わされた。また次回。